

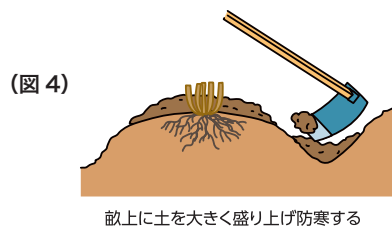
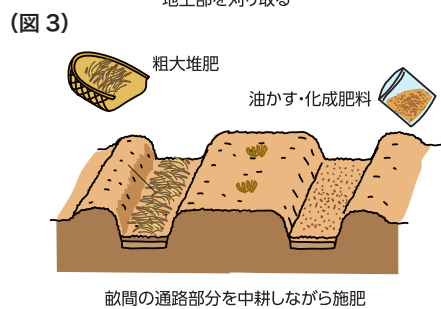
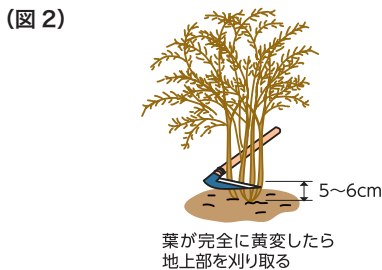
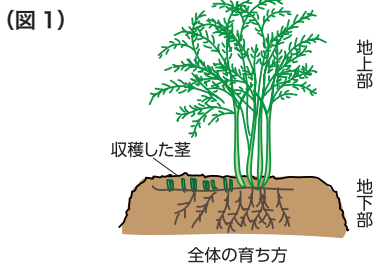
チャレンジ！
野菜づくり

冬の手入れが
翌年の出来を決める
アスパラガス

板木技術士事務所 板木利隆

アスパラガスは野菜の中では長命で、一度植えれば数年は収穫が楽しめます。毎年良い収穫物を得るには、冬の適切な手入れが大切です。

若芽の収穫を一定日数で打ち切り、芽を伸ばしたままにすることで、葉が開いて丈が伸びます(図1)。すると、葉の光合成が旺盛になって、秋に養分が根に蓄えられ、11~12月には株全体が休眠に入ります。霜が3~4回降りると葉の



栽培年数が長くなり、株元の根系が過密になり、株全体が浮き上がるようになったら、冬の休眠中に株全体を掘り上げ、分割して他の畑に、株間を広げて植え替えることで、再び勢いは回復するでしょう。

黄化が進み、休眠はいつそう深まってくる。

ここから先の手入れで大事なものは、葉が完全に黄変し、休眠が深まっている頃を見計らって、地面から5~6cm上の所で葉を刈り取ることで(図2)。この枯れ葉には茎枯れ病などの病原菌が付いているので、落ちた枯れ葉と共に畑の外に持ち出し、焼却または廃棄します。この処置が不十分だと、病原菌が茎や葉の中で越冬して翌年の発生源になり、数年たった大株でも枯死し、大減収になってしまいます。そのためできるだけ丁寧にかき集めて処分することが肝心です。茎や葉をきれいに片付けた後、株元に多くの土寄せをしている場合は、土を一旦、畝の間に戻します。土寄せが少ない場合は、その

まま畝の間の通路部分を中耕しながら、畝の両側に深めの施肥溝を作り、その中に粗大堆肥(発酵度は中程度が良い)と油かす、緩効性の化成肥料を施し(図3)、アスパラガスの根株を深く埋めるようにし、畝上に土を大きく上げておきます(図4)。こうすることで根株を冬の寒気から守ることが出来ます。寒さが厳しい地域ほど土を大きく盛り上げることが大切です。

3月頃、萌芽に支障がでない程度に、寄せていた土を取り除いて畝の間に落とします。このとき春の追肥として、化成肥料や有機配合の肥料などを、1株当たり大さじ3杯程度を目安に与えておきます。ここまで再三、土を動かしたことで、地面付近に落ちていた雑草の種子の発芽を抑えられ、翌年の除草の手間が省けます。

肥料・農薬のご紹介

様々な効果を持つ

「石灰窒素」

石灰窒素20kgには、硫安20kg相当の窒素成分、苦土石灰20kg相当のアルカリ分が含まれており、様々な効果をあわせ持つ、非常に便利な資材です。



土壌にまくと、有効成分・カルシウムシアナミドが、土壌中の水分と反応・分解して農薬効果を発揮します。その後、さらに分解が進んで肥料成分などに変わるので、農薬成分は残留しません。

※必ず適用作物・適用内容等を確認してから使用してください

※かぶれの原因や、酒類への耐性が弱くなる成分が含まれるため、使用の際はマスク・手袋等で防護し、使用当日の飲酒は控えください

■石灰窒素の3つの効果

- ① 肥料効果
窒素が長く効く・カルシウム補給
- ② 農薬効果
殺虫、殺菌、除草
- ③ 土づくり効果
有機物の腐熟促進・酸性土壌の矯正

※ご不明な点は、お気軽に各営農センターまでお問い合わせください



今月の農家さん

お客様の笑顔が見たくて

守山市立田町
井入 吉信さん (41才)



ご両親と一緒に花や野菜を育てている井入さん。秋の終わりは、ストックやアリッサム、パンジー、ピオラ、ハボタンなど様々な花の世話で大忙しです。

以前、井入さんは会社員をしながら、農業に携わっていましたが、ご両親が大ききした農園を守ろうと、40才を機に家業を継いで、本格的に栽培技術を学び始めました。

そんな井入さんが、今の仕事にやりがいを感じるのは、直売所や配達先で、お客様から「いつも良い苗をありがとう」「新しい花も期待

しています」と感謝の言葉を貰う時だそうです。「私が育てる花や野菜を待っているとと言われると、生産者冥利に尽きます」と顔をほころばせます。

今後の目標について、井入さんは「農業は、定植や収穫が注目されがちですが、仕事ほとんどは作物の手入れです。まだまだ勉強中ですが、どうすればお客様に喜んでいただけるか考え、手入れの仕方を試行錯誤する事が楽しくなれば、一人前なのかなと思います」と話しました。

営農情報

平成30年産米の品質低下の要因として、7月中旬以降に高温が続き、稲体が生育を維持するためにデンプンを消費したことで乳白米が増えたこと。そして、収穫期の長雨で刈取りが大幅に遅れ発芽米

品種名	一等比率	
	30年産米	29年産米
コシヒカリ	33.60%	57.17%
キヌヒカリ	26.59%	48.90%
秋の詩	49.02%	64.86%
日本晴	22.66%	35.50%
みずかがみ	78.28%	71.45%

(平成30年11月1日現在)

◆平成30年産米検査結果
平成30年の当JA全体の米検査結果は、表の通りとなりました。早生品種のみずかがみを除き、昨年より一等比率が大きく下がる結果となっています。

◆平成30年産米検査結果



なお、冬期農談会では、これらの対策について詳しく説明させていただきますので、ぜひご参加ください。

- ① 土づくりの徹底
- ② 遅植え
- ③ 疎植と細植え
- ④ 適正施肥(基肥・穂肥等)
- ⑤ 水管理
- (中干し、早期落水防止の徹底)
- ⑥ 適期防除
- ⑦ 適期刈取り

が増えたこと等が考えられます。稲の生育や登熟などは、天候に左右されてしまいますが、引き続き次の対策を総合的に実施して、品質向上を目指しましょう。